



第56号 発行 筑紫丘高校同窓会 福岡市南区野間2-13-1 電話092(561)0662 FAX 092(561)0663 ホームページ http://www.chikushigaoka-dousoukaikai.com/ 印刷 西日本新聞印刷



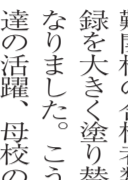
同窓会HP [QRコード]

年頭あいさつ 会長 門司 稔



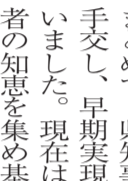
年頭にあたりごあいさつ申し上げます。会員の皆様には、日頃より同窓会活動に温かいご理解とご支援を賜り誠にありがとうございます。

年頭あいさつ 校長 上原 洋祐



「米寿」を迎えた筑高の皆様、同窓会の皆様、明けましておめでとうございます。また、日頃より筑紫丘高校への物心両面のご支援とご協力ありがとうございます。

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)



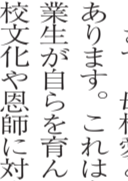
平成27年度の定期総会には、5月30日(土)、「ホテルニューオータニ博多」4階鶴の間にて、多くの関係者の方々の御力添えのおかげで、同窓の皆様をお迎えできる運びとなりました。

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)



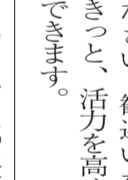
平成26年度の総会において、岩瀬稔実行委員長(高37)から、標を受け継ぎ、開催が近づきます。

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)



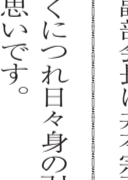
平成27年度の総会において、岩瀬稔実行委員長(高37)から、標を受け継ぎ、開催が近づきます。

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)



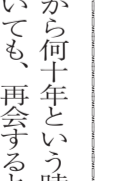
平成27年度の総会において、岩瀬稔実行委員長(高37)から、標を受け継ぎ、開催が近づきます。

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)



平成27年度の総会において、岩瀬稔実行委員長(高37)から、標を受け継ぎ、開催が近づきます。

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)



平成27年度の総会において、岩瀬稔実行委員長(高37)から、標を受け継ぎ、開催が近づきます。

ブロンズ記念像「丘に立つ」への 制作者の思い 高倉 準一



高倉さんが制作した「丘に立つ」像

思えば、筑紫丘高校在籍から、既に長い時間が流れ「彫刻原型」はわがアトリエに現存中なので作品の忘却は有り得ませんが、それにまつわる種々の事柄、記憶が疎くなつてはいます。美術は、文明・文化を彩り、人類史の密度を高めてきたことまじりません。美術教育において表現と鑑賞を通じ感情・感覚・知性、それらの統一を図り創造性・生産性の助長へと導こうとする、人間育成にとって重要な教科であると信じ、授業・部活動に励み、さすがに筑高生、各種の高美展で県下最上級の成績を果たしてくれました。

2年後、再度新たに依頼を受け何とか出来ると「筑高体操」をテーマにとの受託と相成り、ビデオ考察を数度継続。確かに特異なスタイルを持った体操だー私はそこで彫刻的モニュメンタリティにふさわしいポーズ少なしと見たのです。律動性豊かなバロック美術を好む私は熟慮に濱り「槍投げ」を形式化したポーズの象徴化に努めようとの決意に至ったのです。

せっかく、永遠なるモニュメントを創るなら、力強い体操のポーズに筑紫丘高校の校風にふさわしく精神性・思想性を内包した美しい美術品として出来るだけ高次の様相へ昇華させようとなし、数歩先んじた高みを踏破する名門筑紫丘高校のイメージ、「丘」その丘には際限なく開かれた未来への滋養を湛え、時間は常に止まるを知らず、清麗なる大気、果てしない青空に夢をはらんだ白い雲、不意の素足は大地を踏みしめ、不意の瞳は輝き天を指差し、思いを凝視する、昂ぶる胸の鼓動、浮かび上がるいくつもの未来の物語に勇躍する。といった内なる筑高魂のメタファ的風景をりりしい美しい若い姿体で表出し「丘に立つ」と題付けしたのです。

踏んばった足、伸ばした足、真っ直ぐ天を差した腕で暗示する三角形により安定感を与えるコンポジションを示し、気品を落とさないように、筋肉が示す部分部分のマスを、スパイラルを意識し、集積させ、強調と省略を加えながらコンストラクトとした。

槍投げのポーズも選手それぞれにまちまちでしょう。絶対的ポーズは決定づけられないはず。体操の中でも実際の槍投げではなく様式化したものでしょう。実際の競技に臨む場合、必死の状況では出発点で大声とともにとっさに槍を天空を差すように揚げ突進して行くのです。ご理解を持って鑑賞してください。(昭和54年4月～同59年3月・筑紫丘高美術教師、日展審査員、76歳)



台座正面の「創作ダンス」レリーフ

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)

平成27年度の総会において、岩瀬稔実行委員長(高37)から、標を受け継ぎ、開催が近づきます。

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)

年頭あいさつ 副会長 井本宗司氏(高23)

記念館収蔵品紹介⑤



出征日の丸

井上勇氏は、筑中4年(当時16歳)の昭和18年10月、志願して予科練(海軍甲種飛行予科練習生13期)に入隊。この時に筑紫中学の先生方からいただいた寄せ書きの日の丸である。

今村邦夫・井出利郎・花田主計・滝口英夫・古賀五郎・上野寿人・川崎一郎・日野文男・臼井敏男・野口司・小林孝三・柴田鎮・篠原三郎・八尋松次郎・的野勝・鶴崎正男・吉田茂・古川録郎・吉田周蔵・永嶋作市・内田・田中・湯浅力(順不同・昭和18年9月25日署名)

また、この日の丸には特攻で出撃戦死した隊員の名前も井上氏の手で書き加えられている。

記念館には、もう一枚飛永堤氏(夜間・三宅中学1回生)が出征に際して贈られた出征日の丸も保存している。

故 佐藤先輩に捧ぐ 井上 勇(筑中14回)

昭和20年4月26日、四国の詫間(たくま)海軍航空隊(香川県水上基地)で、私(17歳・飛行兵長)は初対面の士官(特攻隊)から話しかけられ、自己紹介で筑中の先輩(中7回・23歳の予備学生)佐藤年正少尉と知りビックリ!士官舎で私の日章旗を見て、とても喜ばれ、私はうれしかった。しかし、その3日後、先輩の零式水上偵察機(偵察員・湯上二飛曹同乗)は250kg爆弾を固着。快晴の詫間基地から穏やかな海面に向かって発進!

私達は隊員一同……現世と別れる体当たり特攻機を悲しみの涙、涙で見送った。合掌

※水上機での特攻は、詫間航空隊の水心隊と北浦航空隊の魁(さきがけ)隊が出撃、終戦まで28機が飛び立った。

—平成25年11月20日記—

吉田周蔵コレクション

旧制筑紫中学校に勤務された吉田周蔵先生が、革製の旅行鞆いっぱいには収集された絵はがきや案内地図類である。総数3,152点。国内はもとより朝鮮半島、中国、台湾、南洋諸島、ロシア、ヨーロッパ、アメリカなどの風景、名所、風俗、建物をはじめ、大正天皇大喪儀や昭和天皇即位などの大きな行事の写真など明治末期から昭和10年代くらいまでのものが収集され、当時の暮らしや軍政下の状況が記録された貴重な資料となっている。

先生自らの収集はもちろん生徒にも呼びかけられたようで、修学旅行と思われる行き先での絵はがきが寄贈生徒ごとにまとめられたものが多数交じっている。また、友人知人に海外などから旅の便りで送られたものも相当数収集されている。

吉田先生は、昭和3年3月31日から昭和23年10月30日まで筑紫中学校及び筑紫高等学校に勤務された地理の先生である。筑中開校2年目から新制高等学校へ移行直後までの20年間勤務された。その後、柳河女子高等学校(現伝習館高等学校)校長に転じられ、昭和28年4月1日田川高等学校長を最後に退職された。

この絵はがきなどが寄贈されたいきさつは不明だが、同窓会が平成元年から歴史資料の提供を呼びかけた際に寄贈を受けたものと思われる。



原爆投下前の広島県商品陳列所(原爆ドーム) = 絵はがき



建築中の国会議事堂 = 絵はがき 鞆いっぱいの吉田コレクション

祝 叙勲

日下部元校長が受章



日下部成邦元校長

平成26年秋の叙勲で、長年の教育功労が認められ、日下部成邦元校長(高16)が瑞宝小綬章を受章されました。

数学の教員として県下の高等学校で勤務し、平成11年に筑前高校教頭から母校筑紫丘高校教頭に着任。同13年に筑紫丘高校の校長に栄転されましたが、翌14年に母校第26代校長として戻ってこられました。

生徒たちにいつも温かい

まなざしが向いていたのは、卒業生であったからでしょう。平成19年の創立80周年記念事業の骨格を作った同17年3月に退職。

退職後は地元那珂川町で各種委員や公民館長などの地域活動が続けられています。

なお、母校第25代校長末永照元先生も同年春の叙勲で瑞宝小綬章を受章されました。

加藤久嘉(定15)

平成26年度総会開催

千人規模で盛大に

平成26年度同窓会定期総会が、37回生による周到な準備を経て平成26年6月7日ホテルニューオータニ博多で、千人規模の同窓生の参加を得て開催されました。

参加者の皆様からも称賛の声をたくさん頂戴しております。中でも、東野利夫氏(中13)からは年配者の席にドクターを配置するなどの配慮を

してくれたことに対しお礼の言葉をいただき、教育支援基金への寄付を申し出てくださいました。

これからも定期総会がより盛会となるよう同窓生の皆様のご協力をお願いします。なお、本年度の総会は平成27年5月30日(土)の開催となります。

人生の節目に、長寿扇子

総会席上で

以前から還暦を迎えた同窓生には、総会の席で湯飲み茶わんや飾り皿などの記念品が贈られていました。平成20年度の総会からは、「祝還暦」

「祝喜寿」「祝米寿」と墨書した長寿祝扇子(飾りスタンド付)を贈っています。



該当卒業生に贈られる長寿扇子。

いずれも中学と高校の校章を組み合わせたデザインになっていて、裏面に中学と高校の校歌が印刷されています。

大谷希幸 会報委員逝去



平成25年度総会から喜寿は高13回までとし、新たに古稀(高14回以降)と傘寿が加わりました。また、この頃から壇上で集合記念写真を撮るようになりしました。この長寿扇子は定期総会のほか、各支部の総会に出席された該当回の同窓生にもお渡ししています。

なお、希望者には実費でおわけしています。加藤久嘉(定15)

大谷希幸会報委員(中18・高1)が平成26年7月28日肺炎により逝去されました。同年2月に2回目の脳出血に襲われ闘病中でした。享年85。大谷先輩は元読売新聞記者で、豊富な取材経験を生かして、平成6年の会報15号編集から委員として取材や編集に携わってこられました。

「吾が良き筑中随想」「女ターザンの筑紫丘物語」「こんにちはお元気ですか」などといったシリーズ物や筑中同窓生の記事は好評でした。

平成17年3月に脳出血で倒れ右半身にまひが残りましたが、懸命のリハビリと生来の記者魂で、不自由な手で同窓生に会報への原稿依頼をしては、その背景解説をされていました。先輩の記事は、硬派を思わせる難解な熟語や漢字を多用する独特の文体でした。お断りしてルビを振った記事の末尾に語句の説明を付けたこともありましたが、字句に関しては非常に厳格で随分と教えられました。

大谷先輩をしのび謹んでご冥福をお祈りいたします。加藤久嘉(定15)

闘病中も筑中関係者に投稿を呼びかけ、自ら筆を入れて出稿。ありがとうございます。(会報委員一同)

教育支援基金 受付名簿

(平成26年4月1日～平成26年11月30日) 掲載は受付順、敬称略

- おかげさまで、これまでの募金総額は430万2818円となりました。
- ▽中村佳谷子(高37)
- 2回▽土師政敏(定10)
- ▽江濱義博(高33)
- ▽松本精一郎(高14)
- ▽東野利夫(中13)▽榎本秀伸(高17)
- ▽渡邊博志(高34)▽寿賀記念者一同▽滝口和美(高24)
- ▽関西支部総会出席者有志▽富田紘(高12)▽加藤久嘉(定15)▽勝野雅弘(高22)▽定期総会実行委員会(高37)
- 今後ともご支援よろしくお願いたします。

復元した甕棺 九国博に展示

郷土研究部部長

2年1組小崎昇平

部員は3人しかおらず存在感の希薄な郷土研究部だが、かつては最大30人ほどの部員を抱えて活発に活動を行っていた。甕棺はその頃に誰かが持ち込んだらしい。記録がまったくと残っていないので正確なことはわからない。

その後、郷土研究部の活動は下火になり、甕棺は長らく放置されていたが、一昨年素晴らしい先輩が現れた。その先輩は甕棺の復元に並々ならぬ関心を持ち、インターネット上の情報を参考に試行錯誤を繰り返しながら、復元の方法を編み出した。そして、とうとう甕棺の復元を完成させてしまった。

完成後、甕棺は九州国立博物館の特別展に展示され、それに関連してテレビや新聞でも紹介された。多くの人に復元した甕棺を見てもらい、大変うれしく思った。

郷土研究部顧問 久我純一
甕棺復元のきっかけは、部

その先輩が引退した後、さらに別の甕棺を復元することになり、私はあまり深く考えず引き受けた。復元の手順は先輩の方法に従い、破片の接合箇所を見つけては、その都度セメダインCで少しづつ組み上げていった。いくつもの大きなパーツに分けて組み立て、最後に一つにすれば完成である。実際には接合する場所を間違えたり、うっかりパーツを落として割ったりして、手間取ったが何とか完成させることができた。



甕棺を復元した小崎昇平君(下)

第4回九州地区高等学校小倉百人一首かるた競技大会 福岡Cチーム(内、樋口颯人と田中琢朗) 優勝

2年11組 樋口 颯人

この度、われわれ百人一首部は私(四将)と田中(六将)の2人が九州大会に出場することができました。本大会は団体戦(1チーム8人で構成)形式で行われ、福岡県からは筑紫女学園高校(福岡A)、福岡大濠高校(福岡B)、そして福岡県連合チーム(福岡C)の3チームが出場しました。1日目の予選リーグを突破し、2日目の決勝トーナメントでは、各県の強豪チームばかりがやはり残っていました。九州No.1になることができ、私と田中はチームに大いに貢献することができました。



この功績は来年の「かるたの甲子園」とも呼ばれる高校選手権団体戦(毎年筑紫女学園高校が出場権を勝ち取っている)や、高文祭に向けてわが百人一首部によき刺激になったと考えられます。

30周年を迎えた 関西支部同窓会

第31回関西支部総会・親睦の集いは、平成26年10月19日ホテルグランヴィア大阪にて、112人の参加を得て開催されました。

総会に続いて行われた親睦の集いでは、同世代での欲談の後、席替え、テーブル対抗筑高クイズ「現役筑高生100人に聞きました」、37回卒業製作の「先輩からのビデオメッセージ」(タモリさん、うえやまとちさん)上映、応援団OBによる演武、物販等が行われ、楽しい一時を過ごしました。また、翌日はゴルフ大会を開催しました。

さて、今回30周年記念行事を開催するにあたり、OBのみならず学校関係者、現役筑高生にもご協力いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

丘仁志会同窓会

高校24回生「丘仁志会」の同窓会が、平成26年11月1日、筑紫野市・二日市温泉の老舗旅館「大丸別荘」で開催されました。25年度が還暦を迎える特別な年として、同窓会の京都開催や定期総会に合わせた漫画家うえやまとち氏デザインのTシャツ製作など記念行事を幾つかしましたので、今年通常年に戻っての開催でした。

当番幹事たちの工夫で、二日市という身近な場所ながら宿泊も可能な形式での実施となりました。おかげで関東や南九州から参加する人もいて総勢59人が集まりました。恩師の原勝興先生と松本儀



同窓生のジャズバンドで、参加者のノリは最高潮に

正先生にも出席していただき、その若々しいお姿に参加者一同感心したものでした。音楽好きな男性5人の「丘仁志バンド」の演奏や、女子による「卒業写真」の大合唱など、修学旅行気分ノリで時間が過ぎていきました。毎月24日に集まる月例会も2年以上続いており、学年の結束の深まりを感じさせる同窓会となりました。(会長 山口吉則)

文芸部

全国大会で 優秀賞など好成绩

出場メンバー

3年 徳勝有紀・坂根慶俊

2年 瀬戸口真悠・日高元樹

江川智一

平成26年6月15日(日)、第17回全国高等学校俳句選手権大会の福岡大会で優勝したことで、筑紫丘高校初の全国大会出場権を勝ち取ることができ、さらに左の作品で最優秀賞を頂きました。

追いつく
つばねのめいじき雲を

瀬戸口真悠
そして8月22日から24日にわたって、愛媛県松山市にて



全国俳句選手権の会場=松山市

開催される全国大会に向かいました。地方大会から約2カ月の間毎日俳句を詠み続け、鑑賞イベントの練習に取り組みすることでメンバー全員の技術や感性はさらに磨かれましたが、全国大会のレベルはとて高く、惜しくも予選リーグ敗退という結果に終わりました。しかし、光栄にも、次の作品が最優秀賞に次ぐ優秀賞を頂きました。

賞を頂くことができました。
青春つて何だ私だ炎天下

徳勝有紀

この俳句を含む筑紫丘高校文芸部の俳句は、個人が詠んだものをメンバー全員でより美しい音や表現、情景はないかと追求し続けたことで生まれたものです。大会で行われる鑑賞イベントでは、俳句を詠む全国の高校生とその追求をすることができました。

この貴重な経験から、多くの作品や意見に触れることでさらなる上達につながるということを実感し、俳句を詠むだけでなく、鑑賞や意見交換も心から楽しめるようになりました。大会の過程によって得られ

た感性や技術だけではなく、大会を通して知った仲間や相手との交流、協力の大切さを生かして過ごしていきたいと思えます。

陸上競技部

男子400m
インターハイ出場

3年10組 清田薫

7月、僕はついに目標としていたインターハイの舞台に立つことができました。初めて経験する全国の舞台。今までは比べようにならないほどの緊張。これが日本一を決める舞台なのだ。あらためて実感させられました。そして迎えた本番、思うようには

いかないうレース、縮まらない相手との距離、完全な敗北でした。勝ちたかった。本当に悔しかった。しかし、いい経験ができました。絶対次につなげます！ここまで来られたのは先生方のご指導や仲間と切磋琢磨しながら過ごした日々、応援してくれた友達・先輩方、そして1年しか所属はしていませんが、サッカー部で養ってもらった体力や負けん気のおかげです。これらのうちどれか一つでも欠けていたらインターハイに行けなかったと思います。支えてくれた全ての人には感謝してもきれません。今ままで本当にありがとうございました。

恒例の筑中・筑高同窓会ゴルフコンペは前年に引き続き「筑紫ヶ丘ゴルフクラブ」で117人(34組)の参加のもと、盛大に開催されました。

第23回ゴルフコンペ開催

恒例の筑中・筑高同窓会

ゴルフコンペは前年に引き続き「筑紫ヶ丘ゴルフクラブ」で117人(34組)の参加のもと、盛大に開催されました。

当日は絶好の秋晴れに恵まれ、午前8時のスタートから順調にラウンドが進み、全員無事に終了することができました。門司会長の挨拶の後、表彰式に移り、有志の方々からの賞品提供もあり、会場も大いに盛り上がり、校歌斉唱の後、散会しました。

なお、成績は次のとおりです。(敬称略)

- ▽優勝 田邊正光(中18)
- ▽準優勝 林田公夫(高16)
- ▽3位 岸川純(高24)
- ▽ベストクロス 中村悦治(高23)でした。(事務局)



優勝した田邊正光さん(左)。右は門司会長

回想

「県代表に一番 近かった野球部」

文・安川孝(中18) 資料・高橋寿(中18)



安川 孝さん



高橋 寿さん

空襲で日本中が焦土と化し、それに追い打ちをかける広島、長崎への原爆投下。刀折れ矢尽きて、昭和20年8月15日に終戦を迎えた。

平和を得た。福岡市内はボンボンと焼け残ったビルが墓石のように立ち、博多湾まで一望できる一面の焼け野原で、市内電車が申し訳なきように走っていた。学徒動員で軍需工場で働いていたわれわれは本来の学生に戻った。

中学3年の2学期であった。ただし、飛行場造り、農作業の手伝い、その他の勤労奉仕と軍事訓練に明け暮れ、勉強不得手の私には、教科の一挙レベルアップに戸惑いもあった。第一、教科書がなく支給される自分で製本する新聞紙大の刷り物も、進駐軍に遠慮してか、ここは不適切、あれもダメと墨で真っ黒に塗り潰してあった。

悲嘆にくれる日本人に笑顔とやる気、勇気をもたらしたのは「リンゴの唄」。フジヤマのトビウオといわれた日大の古橋、ライバルの慶応の橋爪の両選手は泳ぐたびに世界新を出す活躍であった。

もう一つ焼け跡から萌え出す草のように全国に広がり、はやったのが野球である。われわれも昼休みはむろん、授業と授業の間の10分そこの休憩時間にも、手製のボールにバットと素手の、俗にいう一銭野球に興じ、熱中したものだ。

少年期の食べ盛りにもくなく物しか食べていないのに、級友達と投げ、打ち、走る激しいスポーツに喜々として元気にやれたものだと思ふ。裏を返せばすきつ腹を忘れるために熱中したのかもしれない。

筑中野球部も活動を始め、河野昭修投手(のち西鉄ライオンズ)の修猷館とも練習試合をした。

当時のメンバーは左翼手の松村選手を除き、一年上の5年生(中17回生)が主力で、個性のある選手が多く、チャンスに強くチームワークもとれていた。

昭和21年には甲子園(当時は西宮球場)への道も復活し、県予選も筑原宏選手(のち南海ホークス)の投打にわたる活躍もあり、一戦一戦と勝ち進んだ。同時に、下校時には張り番が立ち、応援の練習を強制された。ただし、準々決勝に進むころには全校生徒が自発的に参加し、熱を帯びていった。

へ東宝満 西脊振…の校歌へ聴け玄海の波洗う…の応援歌はもちろん、同級生の藤井凡大君(一年から5年生まで級長をした秀才で、九大卒業NHKの人形劇の音楽を担当するなど音楽界で活躍)の作詞作曲による応援歌(注)を練習した。

筑中野球部は福岡県代表を決める優勝戦に駒を進めた。相手は小倉中学。香椎球場での試合は、1点リードして優

位に立ったが、途中降雨で中止。再試合で、小倉の畑間一原のバッテリーに負けた。残念無念、惜しかった。雨さえ降らなかつたらと不運を嘆き、未練に思ったのは私だけだっただろうか。

先輩、下手投げの武末悉昌投手(南海ホークス、西鉄ライオンズ)だけが好投したのを誇りに思っています。

(注)

へ筑中の野球部は時計の針よ 何時も勝ち勝ち 音がする ソレ! 今度も勝った 又 勝った

へ道祖神社の神主がおみくじ引いて 言うことには 今度の試合は 筑中の勝ち勝ち

もしも筑中が負けたなら 電信柱に花が咲き 絵に描いた達磨さんが 下駄はいて踊り出す

◆筑中先発メンバー
打順 1 川島 2 野原 3 丸尾 4 上野 5 丸尾 6 丸尾 7 丸尾 8 丸尾 9 丸尾



「丘女会」だより

シンボルは「おかめ桜」

桐生真紀(高37)



おかめ桜をご存じでしょうか?ソメイヨシノよりも

紅の濃いこの小ぶりの桜は、どことなく少女を思わせるような可憐な風情があります。

このたび「丘女会」のシンボルマーク作成のご依頼を受け、おかげを蒙り取り入れる案を頂戴しました。「豊かな教養・理知に富んだ善良な教育」まさに丘女の目指

すにふさわしい花言葉をもつこの桜と、OKAMEのOの字形から、人の和をイメージしたデザインを意図しました

社会人講話

社会の一線で活躍している卒業生を講師に招いた社会人講話は例年5月下旬〜6月上旬に開かれる同窓会総会当日の午前中に行われる。



毎年開かれている社会人講話

若き日に薔薇を摘め 社会人講話の講師を務めて 神屋由紀子(高37)

昨年、夏から晩秋にかけて福岡女子大名教授の秋枝薫子さんの聞き書きを新聞で連載した。「女性の輝く時代」「女性活躍」と最近、耳にするキャッチフレーズがしつこ

くない。戦時中、旧制帝国大学に女性が入り現在94歳の秋枝さんの話から日本の女性の歩みを辿ろうと考えた。私は男女雇用機会均等法施

ちました。彼女の住むパシトゥン人の国は、「男の子が生まれると祝砲を上げ、女の子が生まれるとカーテンの影に隠す」社会。日本という国にいれば、教育は受けられて当然、学んで自身をどう利するかという発想に偏りがちです。しかしながら、教育をうけること自

体が困難な状況を体感することのたつた十六歳の彼女の言葉は、受けた教育をどう社会に還元するかという、シンブルでありながら本質的な視点を思い返させてくれます。同賞の候補にはまた、戦争放棄を謳った憲法九条が挙げられたことも私たちにその意味あ

の深さを再考させます。私たちはたかだか二、三十年の歴史を振り返ってさえ、当時の社会は間違っていたと認識できている、と感じるような動いていた、と感じるような事柄が多々あります。しかし只中にあると、そのことに気がつくのは容易ではありません。未来の人々にとっての「当時の人々」私たちが、名もなき多くの先輩がその努力の集積の上に築き上げてくれたもの、大切さを意識し、少しでも何かを進めて次の世代に渡していきたいものです。

デザインに、平和な世界、命を地球の姿を少しでも重ねていただければ幸いです。(母校美術教諭)

宴座

数年前ボケ防止を兼ねて古文書解読講座を受講した。その後、受講生で会を作り先達に

ないという不文律があった。中学校でホルンやトロンボーンを吹いていた女子は、クラリネットなど木管楽器に転向させられた。福岡には全国大会常連の私立女子校があり、女子が金管楽器に不向きでないことは歴然としていた。それでも「伝統だから」と先輩たちに受け入れられない。結局、私たちの学年がリーダーシップを取るようになるまで不文律は続いた。

音楽部の行事は女子が必ず弁当を作る決まりで、体育祭も裁縫係は女子。不器用で家事の手伝いをあまりしない私には苦痛で仕方なかった。

昨年6月、高校の社会人講話で話した。この10年ほど東京勤務から釜山、ソウルの特派員となり、帰国後、北朝鮮でも取材した体験を中心に高校時代のことも触れた。昔話と笑われると思ったが、生徒の感想文に私と同様の窮屈さを綴ったものがあつた。

理不尽とはいへ、私にとつては自分が置かれた社会的状況を考え、今の仕事を選ぶきっかけとなった経験である。冒頭の連載の動機にもつながっている。高校は友人、恩師から自分がいかに狭い枠の中で思考しているかを教えてもらい、人生の指針を得た場

後輩には英国の詩人口バート・ヘリツクの一編から言葉を贈った。瀬戸内寂聴、藤原新也の往復書簡集の題にもなっている。「若き日に薔薇を摘め」。10代に大いに悩み、挑戦してほしいという願いだ。

(西日本新聞記者)

福岡藩の執政を預かる播磨はこの年36歳。この歳の私は何をしていただろうか。 肝心のプチャーチン来航の対応だが、「以後之儀ハ別記有之」と別冊になっていて現在解説中である。解説した日記は、幕末史研究の資料として、参考図書借りた母校図書館をはじめ、公共の図書館や研究機関へ寄贈した。書名は「福岡藩家老黒田播磨(溥整)日記」。ちなみに、勉強会の会長は高3回のM大先輩。ボケ防止などと言えなくなりました。 H・K (定15)